

学習障害（LD） - その3 -

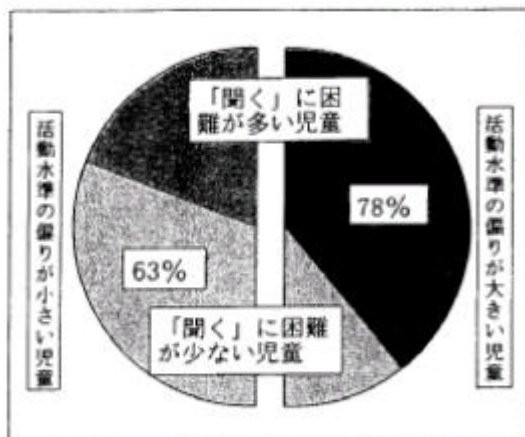
学習困難 - 例えば「聞く」こと - について

学習障害ではないかと推測される児童は、その学習困難が教科学習や社会性・行動面の全般ではなく、一部に偏って現れます。なかでも「聞く」に困難が偏っていることがその特徴の一つです。

昨年度の実態調査でも、学習障害ではないかと推測した児童70名(調査実施校全児童数の約1.2%)のうち、困難の偏りの一つが「聞く」にある児童が、25名いました。また、「聞く」の分野のうち「聞いたことが覚えられない」と「相手の話を聞いていない」項目に困難を示す児童が、3～6年生を通じて多く抽出されました。

外界の情報を取り入れる活動として、「聞く」ことは、基本的な学習活動としての「聞く・話す・読む・書く」という言語活動の中でも特に基盤をなすものです。教師の話を「聞く」ことを抜きにしては「一斉授業」も「個別指導」も成り立ちません。すなわち「聞く」での困難の程度は、児童のつまずきに強く影響すると言えます。

一方、「聞こえているが、(聞くべきことを)聴いていない」という「聞く」における困難は、中枢神経系の何らかの機能障害がその原因として推定される「活動水準(注意の持続、学習活動の安定した速度等)の偏り」と高い相関関係を示す場合が少なくないと言われています。



左のグラフでは、「活動水準の偏り」を示す児童の集団について、該当項目の半数を目安として、偏りの程度の大小と、「聞く」分野での困難の多少との関係を表しています。

「活動水準の偏り」が大きい児童には、「聞く」ことでも困難が多い児童の比率が高く、「偏り」が小さい児童では、「聞く」ことの困難も少ない児童の比率が高いことが分かります。

なお、中枢神経系でも、他の機能の障害が原因になる場合もあり、他の検査等も踏まえて詳しく把握することが必要です。

「活動水準の偏り」にせよ、他の中枢神経系の機能障害が原因であるにせよ、意図的に聞かないのではないので、いわゆる「叱咤激励」だけでは、児童を追い込むおそれがあります。さらに、情緒的に不安定になり、関心・意欲の低下による二次的なつまずきや遅

れを累積させ、かえって逆効果になることも考えられます。

その場合の指導は、自信を失わせないように、わずかな変化や伸びを、きめ細かく評価することや、声かけによる指示と併用して、身ぶり・絵カードなど視覚または他の感覚的手がかりで印象を強化し、「聞く」活動を補う方法を活用することが大切です。

総合教育センターだより第56号より